

【講題】聞 見 一 致

【副題】本願招喚の勅命で戴く浄土真宗のみ教え

Ver.11

【日程】平成26(2014)年7月12日(土)

蒲生下組親鸞聖人讃仰会特別布教

【会所】西念寺様

【時間】13:45 ~ 14:30

【出講者】正覚寺愚住 堅田 玄宥

ご讚題「信心獲得章」

- 「信心獲得すといふは第十八の願をこころうるなり。この願をこころうるといふは、南無阿彌陀仏のすがたをこころうるなり(以下、略) (『御文章』五帖第六通「信心獲得章」)。

才市同行の逸話から

・得道の人、妙好人のいらっしゃった世界に驚きの眼を開かずにはおれませんでした。こんな世界があったのか、曾て若かりしとき才市さんの自問自答のお言葉に出会ったときの大きな驚きでありました。

「才市よい。」「へ。」

「今、説教をしたわ、誰か。」「へ。安楽寺の和上さんであります。」

「そうではあるま(い)。」

「へ。蓮如さんでありました。」

「そうではあるま(い)。」

「へ。弥陀の直説、なむあみだぶであります。」

「才市よい。」「へ。」

「今、念仏をとなえたわ、誰か。」

「へ。才市であります。」

「そうではあるま(い)。」

「へ。弥陀の直説であります。機法一体であります。」

「浄土真宗のこれから」に聞く

- 平成25年4月『浄土真宗のこれから』と題した御門主と前門様のご対談本が築地本願寺より発行されました。
- それには、教学上は信心正因 称名報恩(→信心一つでお救いに与り、お念仏はその後の報恩の思いから称えるものであることをいう)は、正しいけれども、救われたいとも救われたとも思っていない現代人にそれをそのまま言ってみても伝わらない。
- 現代人には、「南無阿弥陀仏」は、感謝の念仏だと説く前に、阿弥陀様が喚(よ)んでいて下さるお喚び声だと伝える方が理解されやすいのではないかと感じており、(私自身も)その旨もっとはっきりと伝えたいと思っていると明言されました。
- 伝道にはハンドル操作の説きぶりではなく、エンジンとなる説きぶりが必要である、それにはお聖經に示された御文を選び直し鍛え直すことが必要だとも予て承って参りました。

信心獲得章の発見

- 「南無阿弥陀仏のすがたをこころうるなり」とはどういうことか？

南無阿弥陀仏のすがたをこころうるとは

- 徳永勸学寮頭は、浄土真宗のご本尊は、異民族異教徒(現代人も同様かと窺われます)には、お木像でご案内するのが良い。
- お姿を眼で焼き付けて頂戴し、
- しかるのち、これは阿弥陀如来のお慈悲を顕していると説明するのが無難だ。
- 六字そのままでは、まるで呪文のように受け取られ、そのお心をご案内しようにも長々とした説明になって用をえないからだ (Ref平成25年4月布教団通信)とおっしゃいました。
- 蓮如上人が「**なむあみだぶつのすがた**」とおっしゃったのにも同趣旨の大きな可能性が潜んでいるのではないのでしょうか？

住立空中尊の意味するところ

- 「あきらかに聴け、あきらかに聴け、よくこれを思念せよ。仏、まさになんぢがために**苦悩を除く法を分別し解説すべし**。なんぢら憶持して、広く大衆のために分別し解説すべし」と。
- この語をときたまふとき、無量寿仏、空中に住立したまふ。観世音・大勢至、この二大士は左右に侍立せり。」
- これを**住立空中尊**(じゅうりゅうくうちゅうそん)と申します。

韋提希夫人のおはなし

- ここで、ここまでの韋提希(イダ'イケ)夫人のお話をご紹介します。

住立空中尊の意味するところ

- 『観経』第七華座観で、韋提希に対して、「**苦悩を除く法**」を説こうとお釈迦様がおっしゃるやいなや、空中に弥陀三尊がお姿をお現しになったありさまは、**お姿そのものが「除苦悩法」**であることを顕しています。
- **住立空中尊こそは、浄土真宗のご本尊だったのです。**
- 心相羸劣(しんそうるいれつ)の韋提希には、**るる除苦悩法**を説いたのではまどろっこしい。救い主がお姿を現されることの方が端的なお救いだったのです。

お姿こそは声なんです(聞見一致)

- 住立空中尊のお姿に対して「お姿こそは声なんです」と梯 実圓和上がご講義でおっしゃったのです。
- これを聞見一致と申します。
- 「聞見一致」とは、救い主である阿弥陀如来のお姿を目の辺り仰ぐことと、如来様が喚(よ)び続けて居て下さるお喚び声をお聞かせに与ることとは一つのことだったと頂戴できます。

六字釈(発願回向)

- 今生は、必ずしも住みよい世界ではありません。私たちの本質は、何度も生まれ変わり煩惱成就した苦悩の存在だからです。
- そのような衆生を放っておくことができず、真実の世界から大悲が発動され、法蔵菩薩と現れ給ひて、衆生救済のお手立てを五劫思惟してご本願をお建て下さり、兆歳永劫のご修行によってそのご本願が成就し、南無阿弥陀仏のお名号となって仕上って下さり、ただ今、阿弥陀如来はましまして働き続けに働いて居て下さるのです。
- お立ち向かいにお木像・ご絵像は、「住立空中尊」をかたどったものであり、本質は、「南無阿弥陀仏」のお名号であります。

六字釈(帰命と発願回向)

- お浄土の存在も知らず、まだ生まれたことのないお浄土に生まれたいとも思わない衆生の為に、法蔵菩薩はご本願をお建て下さり、やがてそのご本願が成就して、南無阿弥陀仏のお名号となって仕上って下さいました。
- そのお名号に衆生をして如何ようにして遇わしめるか、如来様はご思案になり、それにはその者の口を通して南無阿弥陀仏と称えしめる大行を与えるより他はないと思い立たれて、称名念仏の口業を往相回向して下さいましたのです。

六字釈(帰命)

- 「さあ称えてご覧」との仰せにしたがいお念仏すれば、
大行(南無阿弥陀仏と称える行為)は、法として働き、
大信は、勅命に疑いがなくなったとき賜り、
証果は、真実の世界から漂いだして働いていて下さいます。
大悲のお心に基づきます。
これを**証果の悲用**(しょうかのひゆう)と申します。
- 浄土真宗の今生での救いは、攝取不捨といい、信心獲得のそのとき賜っているのでこれを信益同時と申します。

名 聲 (みょうしょう)

- それでは、お喚び声とは何か？
- 如来様から賜った南無阿弥陀仏と称える行い(口業)を行わずるとき、直ちに聞こえて下さる南無阿弥陀仏こそは、如来様そのお方のお喚び声に他ならないのでした。

帰 命

- 「南無」とは、「帰命」、「帰せよ」の命、「お願いだから私の願いを聞いておくれ」との切ない願いを込めて下さっている**如来様のお姿**を表わします。
- 衆生は、放置すれば苦悩のまま迷いの世界を輪廻しなければならぬから、如来はこれを捨て置くことができず、しっかりと抱き抱えて決して捨てない(攝取不捨)とすっきりと立ち上って下さっているお姿を表しているからです。
- 南無の二文字は、**ご本尊のお姿**を表していると同時に、如来様のお慈悲に遇えばこそ、今生で攝取不捨の利益に遇わせて戴いている**衆生(私)の姿**を表していると頂戴できます。

何をお聞かせに与るのでしょうか

衆生は、聞名によってお救いに与ります。

- では何をお聞かせに与るのでしょうか。
- お聞かせに与るのは、

お名号のおいわれ、これが一つ。

それと私を喚び覚まそうとなさる如来様のお声そのものです。

前者は仏願成就のものがたりであり、後者は、ありありと如来様にお会いさせて戴く如来様の働きそのものであります。

- 年齢を問わず、知識や理解力の如何を問わず、責め苦の厳しさを問わず、お聞かせに与るのは、お喚び声だったのです。

善導大師の御指南

六字釈の根拠は観經下々品の十声の称仏

- 「『観經』下々品の十声の称仏は、すなはち十願十行ありて具足す。」とあります。
- 観經下々品の悪人が命終に臨んで、善知識のお念仏の勧めに遇うたが、苦に逼(せ)められて念仏するいとまがありませんでした。
- そこで、善知識は、一歩進めて、それなら、ただ声に出して十回お念仏なさいとおっしゃって南無阿弥陀仏と称せしめられたのです。
- するとただ仏名を称する念々のなかにおいて八十億劫の生死の罪が除かれて、その人はお浄土に生まれることができたのです。
- 六字には、浄土に生まれたいと思う願のみならず、如来様の行が込められていたからだというのが善導大師のご指南でありました。

六字釈一歸命

- 親鸞聖人は、寧ろ、「歸命」に着目され、「歸」と「命」に字訓を重ねて、「歸命」には、本願招還の勅命という意味が込められている趣旨を明らかにして下さったのだったのです。

「歸」の字には、

「歸」には「至る」という意味があり、

歸悦、歸説という熟語になって「よりたのむ、よりかかる」という意味があり、

熟語の相手方の文字「説」には、告げる、述べるという意味があり、阿弥陀仏がその思し召しを述べられるという意味になること、

以上を総合すれば、「歸」には

「(衆生に至り届く)阿弥陀仏の思し召しにおまかせすべし」というお心か。 p18

六字釈一歸命

次に、「命(みょう)」の字は
阿弥陀仏の業であること、
阿弥陀仏が招き引いていて下さること、
阿弥陀仏が衆生を使役なさること、
阿弥陀仏が、その思し召しを教え知らせていて下さること、
(称えるという大行を行ずれば)浄土に続く道が通じて下さること、
阿弥陀仏の救いのまことを疑いなくうけとめよとのお心であり、
阿弥陀仏の御計(はからい)であり、
阿弥陀仏が衆生を召し(=呼び寄せ)ていて下さるから

以上を総合すれば、「命」には

- 「南無阿弥陀仏と称える行いは、如来様の業(大行)だから、行ずれば、浄土に続く道が通じて下さいます。それゆえその如来様のまことを疑いなく受入れ、私の国に生まれてくるんだよとのお召しに与れば、阿弥陀仏の御はからいに乗託して終にお救いに与ることができる」ということになります。

六字釈一歸命 = 本願招喚の勅命

以上の「歸」と「命」の釈義を総合して、

- 「歸命」は、如来様が本願のお心から衆生を招き喚び続けていて下さるご命令(本願招喚の勅命)である、と結論付けられたのでした。
- これを、衆生の側から見れば「歸命」と申すは、如来の勅命にしたがふこころなりと仰せ下さったのです (Ref『銘文』註釈版聖典 P651)から、「歸命」というのは、如来様の本願の思し召しをそのまま疑いなく頂戴する信心そのものになることがわかります。

六字釈一歸命 = 能回向の相

先哲は、歸命とは、「能回向の相」とおっしゃっています。

- これは南無阿弥陀仏の南無 (= 歸命) には、お名号を衆生に聞かしめんがために、本願招還の勅命となって届いて下さっているのが如来様がただ今働いていて下さるお姿であることを意味します。
- 蓮如上人が「南無阿弥陀仏の姿をこころうるなり」と仰せ下さったのもそのお心かと窺われます。

名聲十方に超えん

声になって届こうというのはご本願のお心です。なぜなら

- 仏、阿難に告げたまはく、
- 「そのときに法蔵比丘、この願(四十八願)を説きをはりて、頌(じゅ)を説きていはく、
- 『…われ仏道を成るに至りて、**名聲十方に超えん**。究竟(くきょう)して聞こゆるところなくは、誓ひて正覚を成らじ。…』」と
(Ref『大経』巻上「法蔵発願 重誓偈」註釈版聖典P24)
- 「名聲」とは、お名号そのものというよりは、お名号が「聲」になって届いて下さるその働きのお姿を表しているからです。

名聲十方に超えん

「声」という字は、当用漢字で見る限り、その構造は見えませんが、本字体の「聲」では、声に出して口に称えせしめ、その耳に聞かしめずばおくまいとの如来様の強いご意志を窺わせる構造を持っているからです。

- 因みに、「叕」は、字画の「トナエ」であります。ここでは「トナエ」を「称え」と頂戴します。
- 煩惱成就の凡夫には、口業による讚歎のお念仏を仏が往相回向して下されると曇鸞大師が明らかにして居て下さったのでした。

聞名 = 信心獲得

- 如来様の仰せのままに、「南無阿弥陀仏」とお称え申したのですから「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さったのです。
- このとき、聞こえて下さった「南無阿弥陀仏」こそは、如来様の願いの通りに称えさせて戴いたのですから、如来様そのお方のお喚び声だったと頂戴することができます。
- 「さあ、称えてご覧」とお与え下さったお念仏を仰せのままに称えさせて戴くというと、大行(法)が私の上で働いて下さり、「南無阿弥陀仏」のお名号をお聞かせにあずかる(聞名)のです。
- こうして名(みな)を聞くことが信心を頂戴したことになるのです()。
- 註)きくといふは、信心をあらはす御のりなり(Ref【一念多念文意】註釈版聖典p678)。

住立空中尊の今日的意義

- 「苦悩を除く法」を説こうとお釈迦様がおっしゃるやいなや、お姿をお現しになった弥陀三尊は、お姿そのものが「除苦悩法」であることを顕していました。
- 聞見一致なのですから
- 「さあ、称えてご覧」とお勧めになる如来様の思し召しにあって「南無阿弥陀仏」と称えれば聞こえて下さる「南無阿弥陀仏」こそは、如来様そのお方であり、お声そのものが「除苦悩法」だったのです。
- 心相羸劣(しんそうるいれつ)の衆生には、お名号(除苦悩法)の謂われをお説き遊ばすに当たり、救い主がお喚び声となってお姿を現されることは、何よりも端的なお救いだったのです。

信心獲得、攝取不捨

- このようにして名(みな)をお聞かせにあずかって
- これこそ、如来様の思し召しでございましたかとうなづけたときを「信一念」といい(Ref「信一念釈」註釈版聖典p250)、
- その瞬間、衆生(私)は如来様のふところに抱(いだ)き取られ(信益同時、攝取不捨)、
- やがて今生の命終わる一刹那、如来様のお膝元へ参らせて戴くのです。
- 攝取不捨のそのとき、正定聚不退の位についていたからです。

得道の人ー浅原才市さん

称えれば、如来様の大願業力により衆生には浄土へと続く白道を賜ります。その道は、得道の人が既に歩まれた道であります。

- では、得道の人、妙好人のお言葉をお訊ねしましょう。

一介の下駄職人浅原才市さんは、

- 「才市よい。」「へ。」
- 「今、念仏をとなえたわ、誰か。」
- 「へ。才市であります。」
- 「そうではあるま(い)。」「へ。弥陀の直説であります。」と自問自答されました。

得道の人ーお軽さん

六連島(むつれじま)のお軽さんは、次のように歌われました。

- きのふ聞くのも 今日また聞くも
ぜひにこいとのおよび声
- 鮎は瀬にすむ 小鳥は森に
かるは六字の なかにすむ
- 姿こそ 六つれで月日 くらせども
やがてところは 花のみやかに
- なきあとに かるをたづぬる 人あらば
弥陀の浄土に 行たとこたへよ
- 最後の一句は辞世の句であります。
- お軽さんがいらっしゃればこそ、お念仏すれば如来様の大願業力に与り、衆生(私)も又浄土へと続く白道を賜ります。道は、私をお育てに得道の人がお還りになる道でもあります。こうして、私も又その道を辿り浄土往生間違いなき身と慶ばせて戴くことでもあります。合掌。